

2つの生産量日本一～ほうふう＆木の芽

木曽呂を含む神根地区は市内で農家が最も多い地域ですが、中でもほうふう(防風)と木の芽の生産量は全国有数です。

ほうふうはセリ科の多年草で、苦みと芳香、シャキッとした食感が特徴です。刺身のつまや、根は漢方薬にも使われます。地域でまとまって生産しているのは、日本中探しても、ここ神根地区だけと言われています。最盛期は毎年3月～6月で、収穫されたほうふうは5本1組にして、まこも(水辺に生えるイネ科の植物)で結んで出荷します。このやり方は江戸時代から変わっていません。

木の芽はさんしょうの新芽で、独特の香りが料理を引き立てます。収穫作業は朝早くから行われ、ビニールハウスで栽培されたさんしょうの新芽をピンセットで摘み取ります。

収穫された作物は東京の市場から全国各地に届けられ、料理に彩りと深みを与える存在として活躍しています。

川口発、全国へ高級食材の生産地



川口市経済部産業振興課

〒332-8601 川口市青木2-1-1

電話:048(259)9018

FAX:048(259)2622

2018.9

都内至近でネイチャー体験 お弁当持って出かけよう

JR武蔵野線または埼玉高速鉄道(SR)の東川口駅がスタート。住宅地ながら緑も多く残る一帯を歩きます。雑木林の差間中公園を通り、東沼神社へ。神社の裏手はすぐ見沼代用水東縁が流れていて、少し歩くと、昆虫や魚、鳥たちに親しめる川口自然公園があります。広い園内を散策したら、きれいに整備された木洩れ日の道をたどって木曽呂の富士塚へ。木曽呂地区の南側にはほうふう農家が集中しています。こう門式運河の見沼通船堀を見て先人の知恵にうならされ、田畑が広がる見沼の景色に心奪われる。都市生活のストレス発散にうってつけのコースです。

B-4 東川口駅

JR武蔵野線と埼玉高速鉄道(SR)が交差する、川口北部の基幹駅。周辺の市街化で利用客が急増しています。駅前には、トンネル掘削機を模したSR開通記念オブジェや吊り下げ式のフラワースタンド、ロクハウス風のトイレなど、ユニークな設備が並びます。



B-3 差間ふれあいの道

北原台公園から武蔵野線を渡り、東沼神社に至る遊歩道。車やバイクの通行を制限していて、歩行者にやさしい道になっています。落ち着いた石畳とカラフルなブロックで舗装され、ところどころに置かれたベンチは、道行く人の憩いの場となっています。



A-3 東沼神社

天正元年(1573年)より前に浅間神社として創建したと伝えられています。明治40年(1907年)、近隣社を合祀。見沼代用水東縁沿いの高台に置かれたことから東沼神社と改称しました。学問の神・菅原道真もおまつりしていて、合格祈願の絵馬が多く見られます。



B-3 川口自然公園

のどかな見沼田んぼの一角にあり、湿地の自然を生かした公園です。「チョウの楽園」づくりなど、自然環境の保全に力を注いでいて、カブトムシやクワガタ、絶滅が心配されるメダカも見られます。芝生のきれいな自由広場はお弁当を食べるのにピッタリです。



B-3 みぬmaidaiyousuieigashiribei 見沼代用水東縁

利根川から水を引き、県東部・南部をうるおす関東平野最大の農業用水。約280年前の享保12年(1727年)に完成しました。行田市から都内に至り、水路延長は84キロに及びます。平成3年(1991年)には用水沿いに遊歩道「緑のヘルシーロード」が設置されました。



B-2 こもひ 木洩れ日の道

平成5年(1993年)1月に完成した約470メートルの歩道。石畳などで整備され、所々にしゃれた街灯やベンチが配置されています。道と平行に水が流れ、対岸の竹林からは日差しがこぼれます。初夏には見事なアジサイが咲き、訪れる人の目を楽しませてくれます。



B-2 きそろふしづか 木曽呂の富士塚

富士塚とはいわば“ミニチュア富士山”で、誰でも富士登山ができるようにと築られました。高さ5.4メートル、直径20メートルで、寛政12年(1800年)に造られ、埼玉県内で最古の富士塚。当時の庶民信仰の様相を示すものとして貴重です。国の重要有形民俗文化財。



B-2 みぬまつせんぼり 見沼通船堀

享保16年(1731年)に造られた、東西の見沼代用水と芝川を結び、日本でもかなり古いこう門式運河です。見沼代用水と芝川の水位差が約3メートルもあることから、2つの関で水位を調節しながら船を通行させる方式が考え出されました。完成はパナマ運河よりも183年前のこと。利根川流域と江戸をつなぐ舟運として、昭和6年(1931年)まで利用されました。



ため池から用水路へ～見沼の変貌

巨大ため池の誕生

川口市からさいたま市に広がる広大な湿地・見沼を造り替えた最初の人物は、江戸初期の関東郡代・伊奈忠治です。忠治は、見沼の横幅がいちばん狭くなっている木曽呂の山口橋から対岸の附島(現在のさいたま市)にかけて、880メートルの八丁堤を作って沼地をせき止め、溜井(ため池)を作りました。これが見沼溜井です。

総面積1,200ヘクタールの大規模な溜井は近隣の田畑を潤しました。しかし、水深1メートルと浅いため、上流では大雨の洪水がひん

ぱんに起こり、下流では日照りによる水不足に悩まされるという新たな問題が起きてしまいました。

農業用水と水運の確立

それから約100年後の徳川8代・吉宗のころ。「享保の改革」により、溜井は干拓され、巨大な水田地帯に生まれ変わりました。仕事を担当したのは幕府の普請奉行・井沢弥惣兵衛為永。溜井をせき止めていた八丁堤を崩して下流に水を流し、新たに溜井の代わりにする用水を利根川から引いて、見沼の周囲の西縁・東縁に流しました。見沼の代わりにする用水という意味

で「見沼代用水」と名付けられました。為永は全長60キロにわたる大工事を、農閑期の6か月間という超スピードで完成させました。

為永はまた、東西の見沼代用水と芝川を結ぶ見沼通船堀も開削。舟運が発達するきっかけを作りました。利根川流域からは年貢米や



見沼田んぼの面影を残す川口自然公園

麦・野菜が運ばれ、江戸からは肥料や塩・魚類が輸送されました。

かけがえのない水源

水をたたえ、人びとの生命線となってきた見沼。そこには竜神が住んでいるといわれ、言い伝えも数多く残されています。干拓が行われた後、見沼に住めなくなった竜神は千葉の印旛沼に移ったとの伝説が残っています。

現在は一部が整備され川口自然公園となり、市民のいこいの場になっていますが、田んぼは今も遊水地の機能を残す農業地として存在しています。東京近郊で失われゆく緑が保たれている、貴重な場所といってもいいでしょう。

川口市内観光ルートマップ 7



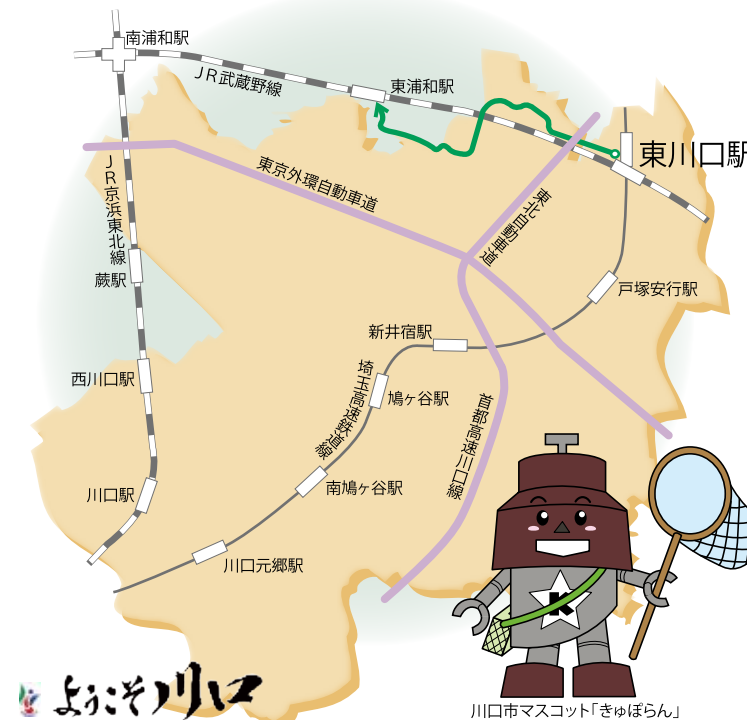
A-3 東沼神社



B-3 川口自然公園

どこまでも緑、武蔵の自然に誘われて

差間・木曽呂コース



ようこそ川口

川口市マスコット「きゅぼらん」



C-2 鬼瓦(朝日神社)



B-3 差間橋

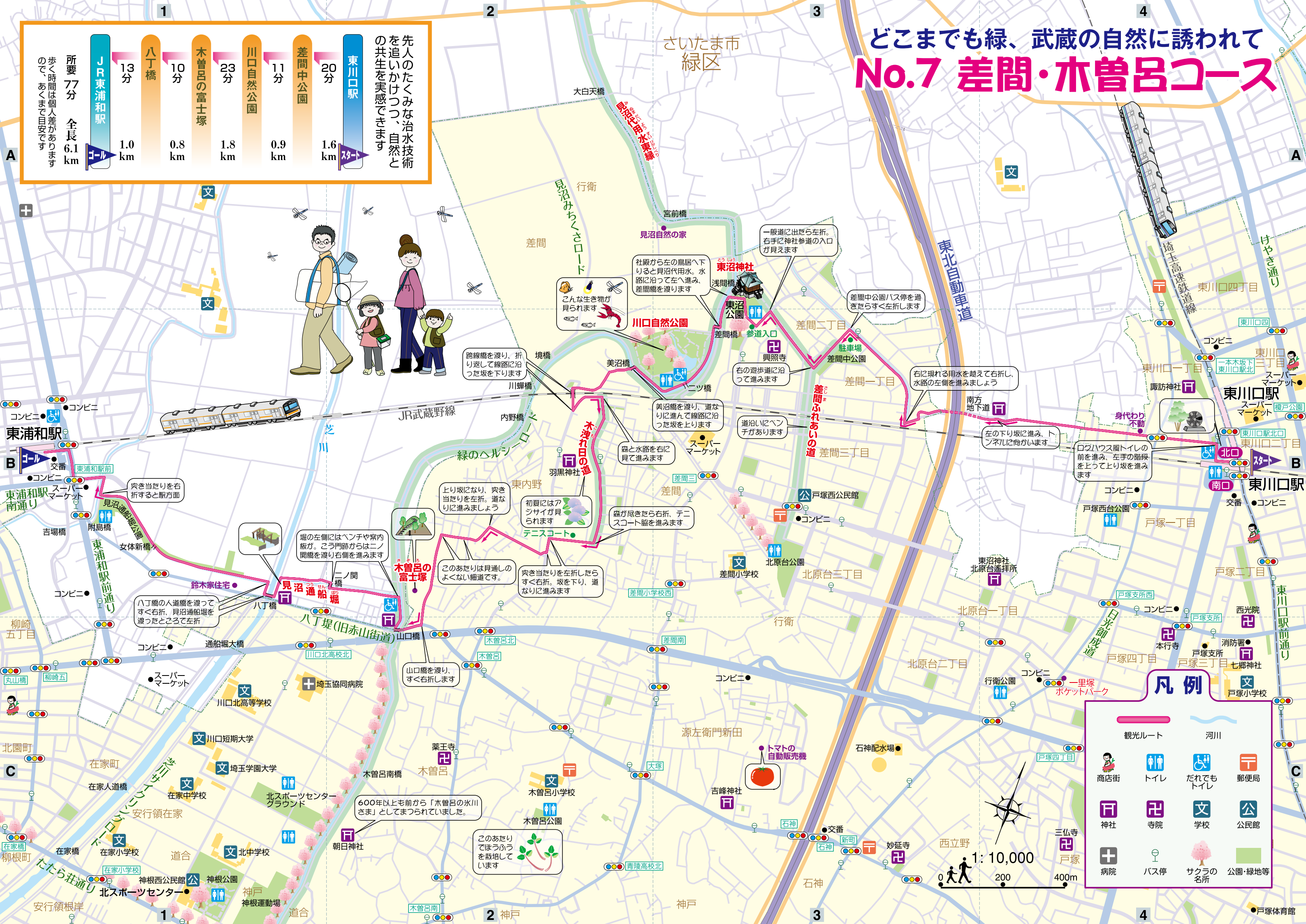


B-3 自由広場(川口自然公園)

どこまでも緑、武蔵の自然に誘われて No.7 差間・木曽呂コース

所要 77分	全長 6.1km	歩く時間 は個人差 があります
東川口駅	スタート	ゴール
13分	1.0km	八丁橋
10分	0.8km	木曽呂の富士塚
23分	1.8km	川口自然公園
11分	0.9km	差間中公園
20分	1.6km	東川口駅

先人のたくみな治水技術
を追いかけて、自然と
の共生を実感できます



凡例

- 観光ルート
- 河川
- 商店街
- トイレ
- だれでもトイレ
- 郵便局
- 神社
- 寺院
- 学校
- 公民館
- 病院
- バス停
- サクラの名所
- 公園・緑地等

1:10,000
0 200 400m